

第一章 幼稚園バスの運転手さんと誕生日

毎日顔を会わせる人といえば、幼稚園の園長先生に同僚の先生達。それと送迎バスの運転手さん。

私の幼稚園には男性の先生はおらず、話するのは常に女性だった。そして慣れてくれば、私が親御さんからのお叱りを受ける事もある。よくあるのはお友達から爪でひつかかれたり、遊んでいるうちに痣が出来たりというもの。

親友の言うとおりであった。最初は体を慣らすのが大変だけど、そのうちストレスが溜まって来る。

彼氏とは月に一回会うか会わないかだし、私が疲れているのもあってお泊りはしないでした。彼も仕事が大変で疲れるだろうからと、特に不満も言わずに会いに来てくれる。だけど何かが足りない気がして、いつも満足できない気持ちで過ごしていた。

ある日、全ての子供をお送りした送迎バスに乗っていると、運転手さんが声をかけてくれた。

「なんか浮かない顔してるね？」

「まあ、やっぱり仕事って大変なんだなって、つくづく思います」

「そうだね。辛くても頑張らないといけないしね」

「少し疲れちゃいました」

「……」

「すみません。こんな事言われても迷惑ですよね」

「何歳だっけ？」

「あ、来週の誕生日が来たら二十歳です」

「お！ 来週二十歳になるのか！ じゃあ誕生日を誰かに祝ってもらったら？」

「そうですね……」

とはいえ、彼氏と会って学校の話聞かされるのも辛いと思っていた。彼からは誕生日のお祝いしようと言われてるけど、その日は平日だから日程をずらすという事になっている。

「誕生日は予定あるんでしょ？ 彼氏とか」

「いえ。平日なので予定は入れて無いですよ。次の日も仕事だし」

「そっか……じゃあ、俺が祝ってやろうか？ って言っても、何か飯を食うだけだけど」

「えっ……」

「いや。もちろん、おっさんと食うのが嫌なら、やめといた方が良いくけど」

「どうしようかな」

「疲れてるんなら焼肉とか」

焼肉……。正直そられる。気取った店で食べるよりも、焼き肉屋で気軽に乾杯するのは楽しいかも。それに年上だし、ご馳走してくれるかもしれないし。

「じゃあ行きます」

「そうか。わかった」

そして家に帰る。すると彼氏からラインが来ていた。

ー 誕生日は再来週の土曜でOK？ ー

なんとなくだるい。でも一応ラインを返す。

ー いいよー ー

ー OK楽しみにしててね ー

ー はい ー

そっけなかったかとも思いながら、私は夜ご飯を食べてお風呂に入った。彼が悪い訳じゃないんだけど、自分だけが勝手に落ち込んでいる。誕生日の週末じゃなくて、その翌週にしたのも疲れていたからだ。鏡を見ると目の下にクマが出来ていて、本当に疲れてるんだと実感した。

それから週末は家でゆっくりとし、次の週の火曜日に運転手さんから言われる。

「今日でいいのかな？」

「はい。お願いします」

「わかった」

そして送迎が終わり、幼稚園に戻って日報を書いて終礼が終わった。私は割烹着を脱いで、先輩たちに早々に挨拶をする。

「すみません。今日はあがります」

「お疲れさまー。ゆっくり休んでね」

「はい」

そうして私は、幼稚園を出て近くのコンビニに歩いて行く。すると駐車場で運転手さんが待っていた。大きなワゴン車で、子供の遠征もあると言っていたのを思い出した。助手席のドアを開けて乗り込むと、運転手さんがニツコリと笑って言う。

「お疲れさん」

「お疲れ様です」

「じゃいこっか！」

少し嬉しそうにしながら、運転手さんは個人経営の焼肉店へと連れてきてくれた。お世辞にもキレイとは言えないような店だけど、滅茶苦茶美味しそうな匂いがして、思わずお腹がなつてしまいそう。

「好きなもの頼んで」

「あ。あのお任せします」

「わかったー」

そして運転手さんが、カルビやロースなどを頼んでいく。すると私の顔を見て言う。

「ビールは飲む？ 今日二十歳になったんだよね？」

「えーと、じゃあ飲みます」

もちろんお酒は飲んだことがある。だけど公にはなくて、学生自体に友達や彼と飲んだ感じ。自分が強いか弱いかもよく分かっておらず、とにかく運転手さんに任せて頼んだ。

先にビールが届いて、運転手さんが言う。

「お誕生日おめでとう！」

「ありがとうございます」

ビールはほろ苦くて、それほど美味しいと感じなかったが、のど越しがシュワシュワして気持ちよかった。

「ストレス解消！」

「なりそうです」

そして焼き肉が運ばれて来た。結構量を頼んでくれたみたいで、運転手さんが焼肉を鉄板に並べ始めた。

「焼けたら食べていいよ」

「いいんですか？」

「俺はもう四十二だから、あんまりいっぱい食うと胃もたれするから」

そうなんだ。私はまだいっぱい食べても胃もたれすることはない。とはいえ大食漢でもないの、ほどほどに食べていく。

「おいしっ！」

「ここ、美味いだろ？」

「ですね！」

本当に美味しくてテンションが上がり、飲みなれないビールも美味しく感じて来る。ビールが無くなつて来ると、運転手さんが聞いて来る。

「サワーとかにするか？」

「はい」

半切りのグレープフルーツと焼酎が運ばれてきて、運転手さんがグレープフルーツを絞ってくれた。それをコップに注ぎ、乾杯をして飲む。

気持ちよかった。なんかフワフワして、学生の若い彼氏とじゃ味わえない雰囲気な気がした。会話も大人の余裕があつて、凄く癒される感じがする。高校生の子供がいるだけあつて、本当に大人なんだなと思つた。

一通り食べ終わった時、運転手さんが言った。

「満足したかい？」

「しましたよー」

「そっか。二十歳とは言え、ストレス溜まりまくりだったんだな。こんな俺で良かったら、いつでも話を聞いてあげるからさ」

「ほんとですかあ」

「ほんとほんと！」

「嬉しいですう」

私は酔っぱらっていたのだろう。ストレスも溜まりまくっていたので、何故かとても開放感を感じていた。

「じゃ、代行車呼ぶから」

運転手さんはスマホを取り出して電話をする。するとしばらくして、焼き肉屋さんに代行車がやって来た。私が後部座席に乗って、運転手さんが助手席に座る。なんとなく話をしてる雰囲気からすると、代行業者と運転手さんは顔見知りらしい。そう言えば、元路線バスの運転手なので、車関係の人脈が多いのかもしれない。

凄いなあ……。なんか大人だなあ。

酔っぱらって車の外を見ていると、楽しそうな自分の顔が映った。だけど疲れもあり、ちょっとウトウトしてしまう。

「着いたよ」

「あ、すみません。寝てました」

そう言って車のドアを降りると、全く見知らぬ場所だった。

「あれ？」

「少し休んだ方が良いと思ってね」

私も彼氏と行った事あるから分かるが、ここは間違いなくラブホテルの駐車場。

「えっ……」

「少し話も聞いてあげたいし」

運転手さんが私の手を取る。何故かその手が暖かく、酔っているせいか私はあまり抵抗することなく、一緒にラブホテルに入ってしまった。

「疲れてる？」

「少し……」

「俺、マッサージ上手いからさ」

「あの…はい…」

ラブホテルのソファに座ると、運転手さんは私の隣りに座り体を反対に向けた。そして肩に手を回して、ゆっくりと肩をもみ始める。

本当だ…。上手。

肩をじっくりともみほぐされていると、思わず涎が出そうになる。その親指が優しく肩甲骨に下りて、指圧しながら腰に触れた。ゆっくりと押されるとストレスが散っていくような気がする。

今日…私、誕生日だったんだ。

すると運転手さんが、私を後ろから緩く抱きしめた。

「あまり頑張るな」

その言葉で、なぜか私はポロポロと泣けてしまった。頑張つてと言われるより、頑張るなといわれる事の方がこんなに楽だなんて。すると運転手さんは、私の首筋にチュッとキスをした。

「あの……」

「楽にして」

そして私は運転手さんの方を見る。

「可愛いな」

可愛い……。正直イケメンの彼氏からすると、私は可愛いと言えるほどじゃない。むしろ釣り合いが取れてないんじゃない？　なんてやつかみを受けた事もある。だけど目の前の運転手さんは、イケメンという雰囲気ではなく優しいおじさんだった。四十二歳の彼からすれば、もしかしたら私は可愛い部類に入るのかもしれない。

正直な所、学校では中くらいかそれより少しマシかなっていう感じだった。イケメンの彼と歩きたびに、周りの人に見られているみたいで辛い気持ちがどこかにあった。そして目の前の運転手さんは、真剣に私の事を可愛いと思ってくれている。

「本当ですか？」

「本当だよ。ずっと可愛いなって思ってた」

「うれしいです」

すると運転手さんが、私の肩を掴んでゆつくりと唇を重ねて来た。

実は、キスをするのは三人目。高校時代に一度だけ同級生とエッチをした事があり、その後は今の大学生の彼氏としかしたことが無かった。高校の時のキスよりも…彼のキスよりも…ねつとりしていて、凄く上手だなと感じる。運転手さんの舌が、私の舌を絡めとった。

私は浮気をしてしまったのである。

あ…まって。私…。

一瞬我に返りそうになったが、運転手さんの上手なキスで体の力が抜けていく。

運転手さんの手が、ゆつくりと乳房に下りて服の上から揉みしだいた。

「やっぱ、胸おっきいな」

「そうですか？」

「バスで見てて、ずっとおっきいなって思ってたよ」

「見てたんですか？」

「まあね」

そうだったんだ。バスの送迎の時は、全くそんな素振りを見せていなかったけど、私の事をそんな風に見ていたんだ。

「ふふっ」

私は笑ってしまう。

「どうした？」

「全然わからなかった」

「そりや気づかれないようにしてたからね」

「そうなんだ……」

そしてまたキスをされる。すると片手でブラのホックを外し、服の中でブラジャーが緩んだ。そのままTシャツの裾から手を入れられて、直接乳房を掴まれる。このあたりも、彼とは違うスムーズな感じで大人の余裕を感じてしまう。

するりとTシャツを脱がされて、ブラジャーを外されると乳房が露わになる。

「やっぱ二十歳は違うな。凄く張りがあって形が崩れていない、ブラ無しでも垂れないんだな」

「エッチですね」

「ふふ」

そうして運転手さんは、私の乳房の谷間に唇を這わせる。丁寧に丁寧に首回りを舐めて、優しくわきの下迄舐めてくれた。

「汗かいてるのに」

「何言ってんだよ。二十歳の君は汚くなんかない」

そう言って念入りに舐めて来る。

「ちくちくする」

「ああ。もう夜だからな、髭が生えてきちゃった」

大学生の彼氏は一日たっても髭はあまり生えなかった。元々体質的に毛深くないようで、一日たってもつるりとしている。だけど運転手さんは無精ひげが生えてきており、それがチクチクと肌にあたる。

「おじさんですね」

「おじさんだよ」

再び唇が乳房にきて、焦らすように乳首の周りを舐めていた。彼ならばいきなり乳首を舐めてくるところだが、このあたりも大人の余裕が感じられる。そして乳首を舐めないままに、そのまま体の後ろに周って背中を舐め始めた。まるで乳首だけがお預けされてるみたいで、乳首のあたりがむずむずして来る。

「あ…」

背中を這う唇が心地いい。たまにちくちくとあたる無精ひげも、何故か心地よく感じられた。すると背中に回った彼が、うなじのあたりを舐めながら、両脇から前に両手を入れて来た。

くりゅ。

私は後ろから両方の乳首をつままれる。

「あっ」

「敏感だね」

彼は私の乳首を軽く引つ張りながら、くりくりとこねくりまわしてくる。

びく！　びくびく！

乳首が刺激されると、体がびくびくと動いてしまう。しかも……その乳首責めが長い。気持ちいだんだんと高ぶってきて、隆起する胸の肌
が栗立っているのが見えた。

おじさんに…触られてる…。長い……。ああ、ちよつと。むずむずする。

長く乳首を刺激されていると、下半身がむずむずしてきて身をよじってしまう。

彼の舌が首筋からようやく前の方に回ってきて、散々弄んだ乳首に触れた。すると彼は乳首を吸いながら、舌で転がし始めた。

こんなにうまいんだ…大人って。

「あっ♡ あっ♡」

「可愛い声だな」

そんな事を言われるだけでゾクゾクしてしまう。大学生の彼氏はエッチの間ほとんど無言だが、運転手さんは私の体を確かめるようにしながら、軽く言葉をかけてくれた。

「気持ちいいです」

私も答えてみる。

「みたいだね。じっくりしてあげるから」

そうして執拗に乳首を舌で責められた。もう片方の乳首はくりくりと指でつままれている。

「あっ♡ あん… ああ…」

声が出る。運転手さんは私の手を取りベッドに連れて行つた。そつと寝かせるように私をベッドに倒し、また乳首を舐めて来る。

「あああ」

しばらくそうしていると、今度は私の両手を枕元に引っ張って、右手一本で両手を固定した。

「綺麗なおっぱいだ」

「恥ずかしい…」

「恥ずかしがることなんてないさ」

そう言つて乳首をつまんでいた指が、するりするりとお腹へ、そしてへそへ下りていく。デニムのボタンをと外されて、ファスナーを降ろし指を滑り込ませて来る。私の両手は枕元でつかまれており、抵抗できないままに左手が茂みへと潜り込んで来た。